海外研修の客観的評価と応用
BEVI と IDI の比較より
Comparison Study of Assessment Tools for Designing Effective Study Abroad Programs

小早川裕子 Yuko Kobayakawa*

2020 年 9 月 19 日

要旨

近年、海外研修の質向上が求められている。可視化の難しいコンピテンシーを適切に評価し研修に反映することは容易でないが、現実は学生レポートが主な評価判断基準となっている。本稿では短期研修において実施した2種類の代表的な評価テストの特性と各測定結果から見えてくるものを明示し、客観的な評価ツールの重要性と今後の研修プログラムを考察する。

Abstract

There has been a demand for improving the quality of study abroad programs. It is not easy to appropriately evaluate competencies that are difficult to visualize and reflect them in programs, but in reality, student reports are the main evaluation criteria. In this paper, the importance of objective evaluation tools is discussed.

＊＊

1. はじめに

近年,海外研修は増加の一途を見せている.海外研修の効果を測り,その成果を明確化する必要があるが,今日でも主な評価法は学生レポート,及び,学生へのアンケート調査で、学生の幼少期から現在までのライフヒストリーをベースに,海外研修の経験が及ぼしたコンピテンシーへの変化を客観的に測る評価テストはほとんど導入されていない.本稿では,学生の潜在的コンピテンシーを可視化し,海外研修前後の変化を客観的に分析するツールが,グローバル人材育成により効果的な教育開発に役立つとの考えの元,同じ海外研修に２つの評価ツールを実施し,双方の特性と分析の違いを明らかにする一方で,グローバル人材育成教育への応用を考察する.

2. 対象研修と評価ツール

(1) 対象研修

2020 年 2 月出発の春季海外インターンシップ・ボランティア・プログラムに参加した 20 名の学生を対象に２つの海外研修評価テストを実施した.本プログラムは,インターンシップ・ボランティアの括りで９種類のプログラムから構成されている.研修国,研修内容,研修期間（2-4 週間）が異なるため,一つの研修として効果を評価する意味が問われるところであるが,本学では春夏で実施している 4 種類の海外研修の効果や学生に人気な理由などを比較するため行っている.特に今回は２つの評価ツールを比較し,研修効果の見え方の違いを理解する事が趣旨で実施したが,その成果は十分に得られたと考える.

(2) Intercultural Development Inventory (IDI)の特性と分析結果

IDI は Milton Bennett による異文化感受性発達モデル（Developmental Model of Intercultural Sensitivity: DMIS：Bennett,1986,1993,2011,2013）を基盤に Michell Hammer が評価ツールとして開発したものである(Hammer,1999; Hammer, Bennett＆Wiseman,2003).IDI では異文化感受性を数値と共に 5 段階（否定,二極化,最小化,受容,適応）で評価する（図１).「否定」と「二極化」は自文化中心的思考で,「受容」から「適応」がグローバル的思考を持つと考えられている.中間に位置する「最少化」は,その移行期である(Hammer, M. 2012).

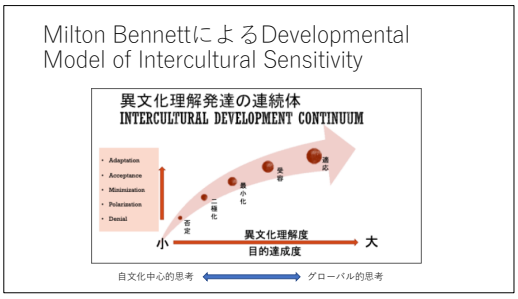

図１： ５段階による異文化感受性発達

	研修前		研修後		変化値
客観的指標 (DO)	最少化	86.18	最少化	86.44	0.26
主観的指標 (PO)	受容	119.35	受容	119.76	0.41

図 2：IDI 研修前後のグループ・プロファイル

*小早川裕子：一般会員（東洋大学・国際教育センター、kobayakawa@toyo.jp）

プログラム名	To	No.	研修前		研修後		変化値
			段階	値	段階	値	
①ツーリズム・マネジメント	Auckland	1	最小化	89.53	最小化	85.32	-4.21
②USA・LA"グローバルキャリア"インターンシップ	Los Angeles	1	最小化	92.21	否定	44.75	-47.46
		2	受容	117.95	受容	124.27	6.32
		3	二極化	83.84	二極化	75.97	-7.87
③USA・LA	Los Angeles	1	否定	66.42	二極化	79.28	12.86
④ベトナム"グローバルキャリア"インターンシップ	Ho Chi Minh City	1	二極化	73.65	二極化	79.44	5.79
		2	二極化	72.95	二極化	73.90	0.95
⑤USA・シアトル　インターンシップ	Seattle	1	最小化	89.18	最小化	97.47	8.29
		2	二極化	84.12	二極化	80.37	-3.75
⑥USA・サンディエゴ　ボランティア研修	San Diego	1	二極化	82.03	二極化	82.27	0.24
		2	最小化	90.82	最小化	97.14	6.32
⑦USA・ポートランド　ボランティア研修	Portland	1	二極化	83.25	-	-	
		2	最小化	95.63	最小化	104.20	8.57
		3	二極化	78.52	二極化	81.55	3.03
⑧幼児教育ボランティア	Sydney	1	最小化	88.04	最小化	96.66	8.62
⑨カナダ・バンクーバー　幼児教育ボランティア	Vancouver	1	二極化	79.89	最小化	85.64	5.75
		2	最小化	86.35	最小化	89.22	2.87
		3	最小化	96.53	-	-	
		4	最小化	94.65	最小化	110.02	15.37
		5	二極化	77.95	最小化	86.92	8.97

図 3：IDI 個人プロファイル

図 2 は研修前後の IDI グループ・プロファイルである.上段の Developmental Orientation (DO)は IDI が算出した評価であり、下段の Perceived Orientation (PO)は,本グループが目指しているレベルである. DO の研修前後の変化値では, 0.26 とあまり変化がなかった事がわかる.一方で本研修の個人プロファイルを見ると,かなりの個人差がある事が見て取れる（図 3).
赤文字の②にいる学生は,最小化から否定へと2段階下げ,-47.46 と大幅に後退した.また,⑨にいる学生は,異文化感受性の段階は最小化と変わらないものの,15.37 も高めた.さらに,段階を高めた学生が,他に 3 名いる事が明らかになった.

(3) Belief, Events, and Values Inventory (BEVI)の特性と分析結果

BEVI では 7 つの領域を 17 の尺度に分けて評価する.本研修から研修前（T1）と研修後(T2)の両方を受検した 16 名が評価の対象である.図 4 はグループ・プロファイルで,50 が平均値である事から,本研修生は

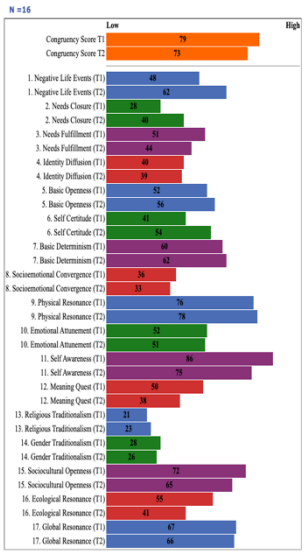

図 4：グループ・プロファイル

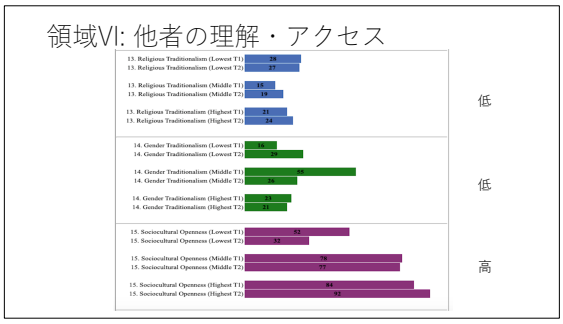

図 5：低中高の 3 層によるプロファイル・コントラスト

コンピテンシーがある程度高い事が見て取れる.この点で,IDI の評価と同じである.これをさらに詳しく理解するために,受験者を低中高で比較するプロファイル・コントラストを領域ごとの変化を見ていく.領域６「他者の理解・アクセス」から解析すると,尺度 14 ジェンダー的伝統主義では,中層が伝統主義に従ってジェンダー問題を捉える傾向が高かったが,研修後はその傾向を大きく下げた.また尺度 15 社会文化的オープン性では、高層はより一層高めたが,低層は後退させた.変化の要因追求には,仮説を立て,学生レポートを読み,インタビューをするなど,時間と忍耐を伴うプロセスを要する.BEVI ではこのように領域と尺度を様々に組み合わせ比較して研修グループの特性を知る事ができる.

3.　グローバル人材育成教育に向けた評価の利用と応用

BEVI と IDI のグループ・プロファイルからは研修の効果・後退を把握するに役立つが,異文化理解力の実態を掴むには IDI の場合は個人プロファイル, BEVI では 3 層に分けたプロファイル・コントラスト見る必要がある.個人プロファイルでは,同じ研修を受けても個人差が大きい事が明らかになり,短期研修でもコンピテンシーに効果がある事がわかった（図３）.しかし,マイナス効果だった学生も存在し,このような自文化中心的思考の傾向を強めた学生を研修後,いかに伸ばしていくかが課題である.グローバル人材育成では,IDI で言うならば,受容から適応段階へと到達させる事が目的となるが,現実では二極化と最小化に位置する学生が大半である.その対策として,異文化理解の理論と海外研修を連携させた,理論と実地の統合型カリキュラムが必要となろう.

海外研修によるコンピテンシーの効果は,学生レポートから測る事は非常に困難である.図３で示した-47.46 も下げた学生のレポートには,研修先・研修内容・ホームステイ先では楽しく学べたと全体を高く評価していた.ただ,1 行だけ,「帰宅途中の夜,グループに後をつけられ怖い思いをした」と書かれていた.本人が認識した以上に恐怖心が支配的でコンピテンシーを下げた事が,この客観的データで明白になった.また,図５にあるジェンダー的伝統主義でも,中層のみ高かったが,研修後に大いに下げた事がわかるのも客観的データの利点である.今後,海外研修をより効果的なプログラムとして開発していくには,客観的データに基づいて,学生レポートや直接インタビューを行い,実状を解析していく必要がある.

参考文献

（1） Hammer, M, R., Additional Cross-Cultural Validity Testing of the Intercultural Development Inventory, Vol. 35, (2011) *International Journal of Intercultural Relations*, pp.474-487
（2） Bennett, M. J., A Developmental Approach to Training for Intercultural Sensitivity, Vol. 10, (1986) *International Journal of Intercultural Relations.* pp.170-198